



MINISTÈRE
DE L'ÉDUCATION
NATIONALE ET
DE LA JEUNESSE

EAE JAP 4

SESSION 2020

AGREGATION CONCOURS EXTERNE

**Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES
LANGUE ET CULTURE JAPONAISES**

VERSION SUIVIE D'UN COMMENTAIRE GRAMMATICAL

Durée : 6 heures

Documents autorisés : Dictionnaire Kôji-en, Iwanami, 1983, et rééditions; Dictionnaire Taishûkan kango shinjiten, Taishûkan, 2001, et rééditions.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel électronique (y compris la calculatrice) est rigoureusement interdit.

Si vous repérez ce qui vous semble être une erreur d'énoncé, vous devez le signaler très lisiblement sur votre copie, en proposer la correction et poursuivre l'épreuve en conséquence. De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, vous devez la (ou les) mentionner explicitement.

NB : Conformément au principe d'anonymat, votre copie ne doit comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé consiste notamment en la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de la signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

1. Traduisez en français le texte joint (extrait de 辺見庸『瓦礫の中から言葉を』NHK 出版新書、2012年)

2. Analysez les expressions soulignées dans le texte.

なにが壊されたのか

わたしはいま、被災地から遠く離れた東京にいて、いわば快適な環境から、かぞえきれない死者たちの霊と、すべてを失ってしまったたくさんの被災者、友人たち、不安にかられている人びとにむかってなにかを書こうとしています。正直、そのことがなにか罪深いことのようにも思われてなりません。わたしがいまいる場所と、それから、いまこの時間にもまさに離儀している人たちとの距離、生きている条件、環境、内面のギャップを、どうしても意識せざるをえないからです。書くことをひるんでもしまいます。

しかし、われわれの身にいったいなにが起きたのか、なにが起きつつあるのか、それはどのような性質の出来事であるのか、なにが壊され、潰^{つぶ}え、なにが生まれたのか、このさきにどんなことどもが出来^{出来}しようとしているのか、歴史はこれからどう変わるのか——を感じとり、ひとつひとつ言葉にしていくのは、作家であるわたしの義務であり運命であると考えます。

故郷が海に呑まれる最初の映像に、わたしはただかにうちのめされました。それは、外界が壊されただけでなく、わたしの「内部」というか「奥」がごつそり深く抉られるという、生まれてはじめての感覚でした。叫びたくても声を発することができません。ただ喉の奥で低く唸りつづけるしかありませんでした。

それは、言葉でなんとか語ろうとしても、いっかな語りえない感覚です。表現の衝迫と無力感、挫折感がないまぜになつてよせあう、切なく苦しい感覚。出来事があまりにも巨大で、あまりにも強力で、あまりにも深く、あまりにもありえないことだったからです。できあいの語句と文法、構文ではまったく表現不可能でした。

大震災は人やモノだけでなく、既成の観念、言葉、文法をも壊したのです。そのことに気づいたのは震災後数日をへてからですが、打つ手はありませんでした。わたしは反射的にいくつかの詩や散文を書き、その後なにも書けなくなつてしまいました。

失語症のような状態はながくつづき、いまでも完治はしていません。ただ、表白の意欲がまたわいてきました。わたしは表現しなければなりません。大震災は人やモノだけでなく、既成の観念、言葉、文法をも壊したと言いましたが、思えば、そのこと自体、表現者が取り組まなくてはならないテーマであるはずです。

瓦礫の原で言葉を手探りし、たぐりながら、とつおいつ考え、ここに記さなければなりません。本書ではとりわけ言葉と記憶について踏みこんで考えてみたいと思います。

場

わたしは宮城県石巻市に生まれ育ちました。ですから、東北の三陸、それから福島県の浜通り一帯まで、テレビや新聞にでてくる地名で、足を運んでいないところはほとんどない、というくらいよく知っています。

とりわけ、壊滅状態となった石巻市の南浜町は、高校までをすごしたところであつて、わたしの感官の土台をこしらえ、触感、視感、嗅覚、予覚、発想、思考法、言葉の基本（母語の祖型）がつちかわれた大事な場所です。もこといえば、わたしの内面の原初の色合いを決定した海と川、大地と空と入江があつた場所なのです。わたしにとって最初の光と影、音と色、はじめての触感のすべてはそこにあつたのです。

それはいまもからだに刻まれています。麦畑を吹き抜ける風の音、水面をすべる光の乱反射、魚たちの白い腹、草いきれ、泥のにおい、脅すような土用波の唸り声、トビの声、汽笛……。

いま、場所と言いましたが、その場所にいたとき、わたしは場所をなにも意識してはいませんでした。三月十一日のあの出来事をへて、わたしはついに思いました。「場」（トポス）は、それを失つたときに、はじめて鮮やかな場になるのだな、と。二〇一一年三月十一日のあの震災、あえて3・11と略称しようと思うけれども、3・11によつて途方もない破壊にさらされた故郷、奪われた数えきれない命を思うときに、わたしにむくむくと「場」がたちあがってきました。

石巻のことに、この震災の前に、わたしは作品のなかで直接的にはあまり触れてはいません。失われてみて、本当にそれは恥ずかしいけれども、びつくりするぐらい、大きな衝撃として気づかされました。その記憶の深さ、大きさ、重さ。いかに自分のなかで、それらが大事だったのか。自分の表現をささえてきた基礎に、あの潮騒、波音、磯の香り、魚臭い空気があつたのだということを思い知らされました。

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie.

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

Concours	Section/option	Epreuve	Matière
EAE	0430A	104	0330